

リスク・ガバナンス

現代の企業組織は大規模化、複雑化し、大きな不確実性の環境下にある。そのような組織が想定外のリスクに遭遇した時、組織の対応の失敗が問題を拡大させ、システム全体の危機を招く。そのような危機は低い確率でしか生じないが、いったん生じたら取り返しのないような重大な結果を招く。サブプライム問題が招いた世界金融危機や福島第一原発事故はその最近の事例である。グローバル化と複雑化が進む現代では、自然災害、技術事故、企業の不祥事などが複合した想定外の危機が頻発しており、これに対処する学問領域を総合した幅広い観点からのリスクの見方が重要になっている。

リスク・ガバナンス(RG)とは、一九八六年のチェルノブイリの原発事故を一つのきっかけにドイツを中心に始まり、二〇〇一年の同時多発テロを引き金に研究が活発化したリスクを統合的にとらえる枠組みである。それは、グローバル化や技術の複雑化の中でその範囲が広がるリスクに関し、政府やNGO、産業界、社会市民などのアクター(関係者)が相互協力をしながら、リスクの防御や対応に向けた意思決定や合意形成

を集団で行う仕組みのことである。

①の著者レンは、ドイツの環境社会学者で、RGの理論的枠組みを最初に提唱した一人である。レンによれば、RGとは自然や技術のリスクに対する意思決定プロセスのシステム的な考えであり、社会の持続性を共通目標とするアクターたちの協調や参加に基づき、災害によりもたらされる人類や経済のコストを削減することで、より効果的なリスク管理を達成する方法である。ここでは、リスクを事前に防御し、事後に管理するための意思決定が行われる際の、市民を含む諸アクターの参加や情報の共有(リスク・コミュニケーション)が重視される。また、経済の持続的発展を達成するリスクを受容し、それに伴うリスクによる負の影響を最小限にすることも考慮に入れられる。国境を越え複雑化するリスクについて、さまざまなアクターの利害を調整し、グローバルでシステミックなリスクの拡散をどう防ぐかが、RGの大きな課題となっている。なお、レンの考え方は、二〇〇五年に国際RG協議会(IRGC)が提唱した、RGフレームワークの基礎になっており、IRGCホームページから要約版が入手できる。

②の著者田尾啓一は、リスク管理のコンサルティングの実務経験と、リスクや

コーポレート・ガバナンスに関する理論

的研究成果をもとに、金融工学のような確率論的世界から複雑系の世界にパラダイムが転換した現代の企業リスクを総合的に説明できる概念を、RGとして提示する。田尾は、リスク管理を持続的企業経営に向けて総合的に考える立場から、株主中心ではなくステークホルダー中心のRGの議論を展開する。監査社会ともいわれる現在の日本企業がリスク対策として取り組むプロセスの標準化やコンプライアンスなどのルールやマニュアルの整備は、RGの必要条件であつても十分条件ではないとして、企業組織の内面から出てくるリスク文化やリスク・コミュニケーションの確立の重要性を説く。リスク文化は、不確実性全般に関する組織内外の予兆となる事態に対する組織の成員が持つ認識力や、事故が生じた際の適切なリスク対応の基盤となる。リスク・コミュニケーションは、そのようなリスク文化を可能とするリスク情報の意味の共有のことである。ROE至上主義、確率論的リスク把握やマニュアルによるリスク対応の株主価値経営が、結果として企業の持続的経営を妨げる恐れがあると著者は指摘する。本書は財務論をベースに企業の観点からRGの体系化を試みた良書である。



① Risk Governance: Going with Uncertainty in a Complex World (Earthscan Risk in Society)
Ortwin Renn
Routledge, 2008



② リスク・ガバナンス
田尾啓一
中央経済社
2013年5月